

## 魏晉七哀詩考

向島成美

一

「七哀詩」とは魏晉の頃に制作された、人生の悲哀をテーマとする抒情詩の一種である。魏晉の頃、より正確に言えば、後漢末の建安の時代から西晉の時代にかけて、詩人たちはこの詩題のもとに数首の作品を残している。それらの中で最もよく知られるのは、『文選』卷二二・哀傷の部に収録される魏の曹植の一首、同じく魏の王粲の二首、そして晉の張載の二首と都合三人五首の作であるが、『文選』に収められるもの以外にも、唐代の類書や『文選』李善注等の中からいくつかの作品を見出すことができる。しかしこれらの類書等の中に散見するものを加えても、上限はやはり王粲、曹植、さらには阮瑀といった建安期の詩人の作からであり、下限はほぼ張載、潘岳ら西晉太康期の詩人の作までであって、現存する作品の限りでは、「七哀詩」は後漢末の建安の時代に突如として現われ、また何故か西晉の時代以後には見られなくなっているようである。

魏晉の時代にはこの「七哀詩」以外にも、複数の作者を持つ詩題がいくつかある。『文選』所収の作品について見ても、「公讌」、「詠史」、「游仙詩」、「招隱詩」、「雜詩」などの例が挙げられる。中でも「詠史」、「雜詩」などが六朝期を通じて息長く作られて行ったのに対し、「七哀詩」の制作が魏晉の時代に限られるのは、晋代に集中的に

作られた「招隱詩」の場合などとよく似ている。そして「招隱詩」が晋代文学の時代性をよく示すものであるのと同様に、「七哀詩」も、時代の幅はやや広がるとはいへ、魏晉時代の詩の性格をよく示すものと言えそうである。一体この時代の詩は楽府との区別も必ずしも明瞭ではないし、テキストによって詩題の異なるものもしばしば見受けられる。またその詩題が作者自身によって設定されたのかどうかも確かではない。従って詩題のみをとらえて云々することにはどうしてもある種の危険が付きまとうことを否めないのであるが、『文選』に三人五首の作が「七哀詩」の題を冠して収録され、また『文選』にやや先立つと思われる文芸批評書『文心雕龍』にも「七哀」の名が見えていることからしても、少くとも六朝齊梁の時代に「七哀詩」の名で意識された作品群が存在していたことは確実であり、かつそれは有力なテーマ詩であつたと思われる。

では「七哀詩」とはどのような性格を持つ作品であつたのだろうか。そこで『文選』所収の作品以外からも「七哀詩」の題で伝えられる作品をできるだけ多く搜集し、それらを全体的に見ることによって「七哀詩」の性格を考察しようとするのが小論の目的である。

## 二

「七哀詩」が人生の悲哀をテーマとするものであることは前に述べたが、では詩題の「七哀」ということば自体が何を意味するのかとなると、定説というべきものはない。「七哀」ということばは王粲ら建安の詩人の作品に詩題として登場するより以前の用例も見出しにくく、その意味を解明することは極めて困難である。小論はそのことに明確な結論を下すことを意図するものではないが、従来どのような解釈がなされて来たのかについては一応見ておく必要があるだろう。

まず最初に見るべきは全五首もの作品を収める『文選』の注であるが、その代表的な注釈者である唐の李善は、この「七哀」について何も触れていない。それぞれの語や事項について一つ一つ典拠を示すことを注釈家の

本務とし、その方法が後世高い評価を受けている李善にしてこのことばに注を施さなかつたということは、それが自明のことであつたからというよりも、当時すでにこのことばの意味が不明だったのかも知れない。それはともかくとしても、六朝期から唐代にかけて「七哀」について説くものが殆んど見当らないことは我々を当惑させる。

そして「七哀」についての最も早い発言と思われるのが、やはり『文選』の五臣注の一つである唐の呂向の注である。七哀謂痛而哀、義而哀、感而哀、怨而哀、耳目聞見而哀、口歎而哀、鼻酸而哀也。

である。この呂向の説は最も初期の発言といふことで、後世、「七哀」について論ずるものの多くに引用されているが、これは哀しみを無理やりに七通りに分けて説いた感が強く、余りにも抽象的に過ぎるところから、概して評判はよくない。たとえば元の李治の『牧齋古今註』（巻八）にいう

且哀之來也、何者非感、何者非怨、何者非目見而耳聞、何者不嗟歎而痛悼。呂向之說、可謂疎矣。

や、清の張雲璈の『選字膠言』（巻一〇）にいう

夫痛・義・感・怨已不甚分明。至耳聞目見・口歎・鼻酸、凡哀何莫不然。強爲分晰、殊屬無謂。

などがその批判を端的に示すものといえるだろう。もっとも宋の葛立方の『韻語陽秋』（巻四）のように、呂向の説を敷衍した形で、「一事にして七者具はるを謂ふ」とか「一哀を以て七者具はるなり」というものもあるが、これもやはり抽象的で分りにくいことは同様である。

呂向の説を不満とするところから出発した後世の議論の一つに、「七哀」を人間の七情と関連づけて説くものがある。前に挙げた元の李治は呂向に対する批判に続けて次のようにいう。

大抵人之七情有喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲之殊、今而哀戚太甚、喜・怒・愛・惡等悉皆無有、情之所繫、惟有一哀而已、故謂之七哀也。不然、何不云六、云八、而必曰七哀乎。

また清の何焯の『義門讀書記』（文選部卷二）にも同様の説が述べられている。

情有七、而偏主于哀、惟其所遭之窮也。

人の七情の中で哀情だけがうたわれているから「七哀」となったというこれらの説も、また余り説得力を持つものとはいえない。

結局のところ「七哀」の解釈は、「七」の解釈をめぐって意見が大きく分れていることを以上の例からも見るこ  
とができるのであるが、次にその「七」の解釈を中心とした最近の主だった説のいくつかを挙げてみよう。まず  
一つには「七」を篇数とする説がある。故鈴木虎雄氏の説がそれであり、鈴木虎雄氏によれば、『楚辞』の「九  
歌」や漢の枚乗の「七発」の類の「九」「七」がそれぞれ篇数を示すものであることから、「七哀」の「七」も篇  
数を示すものであったらうと推定され、後世のものではあるが杜甫の「八哀詩」が八首から成ることを傍証とさ  
れている。また「七哀」の「七」を篇数とする点では同様であるが、その解釈に新しい見解を示されたのが鈴木  
修次氏である。鈴木修次氏は、賦的傾向、賦的叙述様式が詩の世界に取り入れられたものとしてこの「七哀詩」  
をとらえられ、特に枚乗の「七発」を祖とするいわゆる「七」形式の文が漢魏六朝期に数多く見受けられるとこ  
ろから、「七哀詩」も散文の「七」と同じ趣向のもので、七篇の連作であつたらうと考証されている。魏晋の  
「七哀詩」は、現存するものの限りでは後に述べるように個人別に見ると多くとも三首を越えることはないの  
であるが、「七」を篇数と見る説は一つの有力な説といえるだろう。

そして時代は魏晋の頃からはるかに降った元末のものであるから、両鈴木氏の説を直接に補強する資料とはな  
りにくい。明の郎瑛の『七修類稿』（卷一六・義理類）に事実七篇から成る「七哀詩」の例が見えている。それは  
伯顔、字は子中という人が二君に仕えるのを潔しとせず自殺を計った際に、彼の祖先や以前彼と共に行動した死  
節の士などを祭つて作つたというものであり、第一首目の詩は次の通りである。

有客有客何龔龔、國破家亡無所歸、荒村獨樹一茆屋、終夜泣血知者誰、  
燕雲茫茫幾萬里、羽鬪鐵盡孤飛遲、嗚呼我生兮亂

以下の六首は全詩を引くことは省略するが、それぞれ「我祖我父金月精」(其二)、「我母我母何不辰」(其三)、我師我師心休休」(其四)、「我友我友全公海公」(其五)、「我子我子嬌且癡」(其六)、「鳩兮鳩兮置汝已十年」(其七)の句から始まっている。これらの詩を見ると、魏晉の「七哀詩」を直接に承けるというよりも、表現上は「有客有客字子美、白頭亂髮垂過耳」の二句を第一首目の冒頭の句とする杜甫の「乾元中寓居同谷県作歌七首」に擬したと思われる面が多い。しかしながら「七哀詩」という題はやはり魏晉のそれを意識したものであつたらうし、これらの詩が死者を祭る詩としてうたわれていることは十分に注意すべきことである。

また「七哀」を樂府題とする説もある。古くは唐の呉兢の『樂府古題要解』(下)がこの「七哀」を漢の張衡の「四愁」とも漢末に起つた樂府として取りあげているし、近くは余冠英氏がやはりこれを樂府題であるととし、「七」については音楽上の關係からつけられたものであると推測されている。<sup>(5)</sup>音楽上の關係からというのは、「明月照高樓」の句に始まる曹植の「七哀詩」を樂曲用の歌詞に編成し直した作が『宋書』樂志に採られており、それが七解、つまり七段から構成されていることを一つの根拠とするものらしい。

以上の諸説の他にも、伊藤正文氏が「七哀」の「七」を篇数と見ずに「深き哀しみ」の意に解釈しようとするのも一つの意見であるし、さらには白川静氏が「七哀詩」をやはり枚乘の「七發」に始まる「七」系統の文学に属するものとし、「七」形式の作品が古い呪詛文学から出るものであつて、この「七哀詩」も魂振りの歌謡であつたとされるのも興味ある一解釈である。<sup>(7)</sup>

このように「七哀」をめぐる解釈は極めて多岐にわたつており、定説を見るにまでは至っていないようである。確かに「七哀」の語義の解明は一筋縄では行かない困難な問題であり、私はその解明に資するだけの材料を持ち合わせてはいない。ただ一つ私が気になるのは、古代中国人の七という数に対する觀念についてである。一体、中国には七のついた語が多く、諸橋轍次博士の『大漢和辞典』を見ると五七二条の語句が収められている。それ

らを見ると一つには仏教関係の語の多いのが目につくのであるが、「七哀詩」との関連で見ると、私がより興味を引かれるのは、仏教関係以外にもたとえば『札記』王制に見える天子の「七廟」や道教でいう「七魄」のように中国固有の死生観に関りのあると思われる語がいくつか見出せることである。特に「七魄」についていえば、それはいわゆる人の靈魂であり、「三魂」とも人間の体内にあつて精神を司どり、人間の死とともに解体するものと考えられていた。<sup>(8)</sup> また人が死ぬと七日ごとに祭り、七七の四十九日で一区切りとする習慣についても、この「七魄」との関連で説くものもある。「七魄」の語が初出するのは晋の葛洪の『抱朴子』においてであるが、その後、「雲笈七籤」などの道教関係の文献には「三魂」と対になって「七魄」の称がしばしば見えており、恐らくそれは中国固有の民間信仰に基づくものだろう。

「七哀」の「七」も、それが篇数であったか否かはしばらく措くとしても、「七」の数が選ばれたこと自体に何か中国古人の「七」の数に対する特別な意識が感じられる。そういえば枚乗の「七発」にしても、劉勰の『文心雕竜』(卷三・雜文第十四)に

蓋七竅所發、發乎嗜欲、始邪末正、所以戒膏粱之子也。

と述べられており、死生観と直接の関係はないけれども、人間の感覚器官である「七竅」と関連づけて説こうとしている点の一つの興味深い発言である。しかしそのことを突き止めるのは残念ながら今の私の手に余る問題であり、他日に期する外はない。

そこで私が次に考えようとするのは、よく知られている『文選』所収の作品以外からも、「七哀詩」に関する資料をできる限り多く搜集し、それらを全体的に見ることによって「七哀詩」に共通する何らかの性格を見出すことである。六朝期の詩文で『文選』や『玉台新詠』等の総集に採られず、類書等のみ散見する作品は、いきおい断片的にならざるを得ず、作品全体の姿をつかむには十分でない場合が多い。しかしそうしたものを集めてみる作業は、「七哀詩」を考える上でやはり必要なことであろう。

まず建安期の「七哀詩」の作者としては、王粲（一七七～二一六）、曹植（一九二～二三三）、阮瑀（？～二二三）の三人が挙げられる。そして彼ら三人の中では先輩格の王粲には次の三首の「七哀詩」が残されている。

## 其一

西京亂無象 豺虎方遘患  
 復棄中國去 遠身適荆蠻  
 親戚對我悲 朋友相追攀  
 出門無所見 白骨蔽平原  
 路有飢婦人 抱子棄草間  
 顧聞號泣聲 揮涕獨不還  
 未知身死處 何能兩相完  
 驅馬棄之去 不忍聽此言  
 南登霸陵岸 迴首望長安  
 悟彼下泉人 喟然傷心肝

西京 亂れて象無く、豺虎 方に患を遘す。  
 復た中国を棄てて去り、身を遠ざけて荆蛮に適く。  
 親戚 我に對ひて悲しみ、朋友 相追ひて攀る。  
 門を出づれば見る所無く、白骨 平原を蔽ふ。  
 路に飢ゑたる婦人有り、子を抱きて草間に棄つ。  
 顧みて号泣の声を聞くも、涕を揮ひて独り還らず。  
 未だ身の死する処を知らず、何ぞ能く両ながら完からんと。  
 馬を驅りて之を棄てて去る、此の言を聴くに忍びず。  
 南のかた霸陵の岸に登り、首を迴らして長安を望む。  
 悟りぬ 彼の下泉の人の、喟然として心肝を傷ましむるを。

## 其二

荆蠻非我鄉 何爲久滯淫  
 方舟溯大江 日暮愁我心  
 山崗有餘暎 巖阿增重陰  
 狐狸馳赴穴 飛鳥翔故林

荆蛮は我が郷に非ず、何為れぞ久しく滯淫せん。  
 方舟 大江を溯り、日暮 我が心を愁へしむ。  
 山崗 余暎有り、巖阿 重陰を増す。  
 狐狸 馳せて穴に赴き、飛鳥 故林に翔る。

流波激清響 猴猿臨岸吟  
 迅風拂裳袂 白露霑衣衿  
 獨夜不能寐 攝衣起撫琴  
 絲桐感人情 爲我發悲音  
 羈旅無終極 憂思壯難任

流波は清響を激しくし、猴猿は岸に臨みて吟ず。  
 迅風は裳袂を払ひ、白露は衣衿を霑す。  
 独夜 寐ぬる能はず、衣を撰へて起ちて琴を撫す。  
 絲桐 人情に感じ、我が爲に悲音を発す。  
 羈旅 終極無し、憂思 壯にして任へ難し。

(以上『文選』卷二三)

其三

邊城使心悲 昔吾親更之  
 冰雪截肌膚 風飄無止期  
 百里不見人 草木誰當運  
 登城望亭隴 翩翩飛戍旗  
 行者不顧反 出門與家辭  
 子弟多俘虜 哭泣無已時  
 天下盡樂土 何爲久留茲  
 羸蟲不知辛 去來勿與諮

邊城 心をして悲しましむ、昔 吾 親ら之を更たり。  
 冰雪 肌膚を截ち、風飄 止まる期無し。  
 百里 人を見ず、草木 誰か當に運むべき。  
 城に登りて亭隴を望めば、翩翩として戍旗飛ぶ。  
 行者 顧反せず、門を出でて家と辞す。  
 子弟 俘虜多く、哭泣已む時無し。  
 天下は尽く樂土なるに、何為れぞ久しく茲に留まる。  
 羸蟲は辛を知らず、去來 与に諮ること勿かれ。

(『古文苑』卷八)

三首の中、辺境従軍の悲哀をうたった(其三)の詩は、『古文苑』によつてのみ伝わるものであり、他の宋代以前の文献には一切見えていない。この『古文苑』にはさらに題下に「樂集に七哀詩六首有り」という注が付けられている。この注記が事実であるとすれば、現存するもの以外にも王粲の「七哀詩」が別に三首存在したことになる。興味深いのであるが、ただ『古文苑』という書物がその成立に疑問の多いものであるだけに、この注記やさらには(其三)の詩自体が事実王粲の作であるのかどうかについても多少の疑問は残るだろう。また(其三)の詩の押韻を見ると、之韻(之、期、旗、碎、時、茲)と脂韻(悲、遲、諮)とが通押されている。ところが于安瀾の『漢魏六朝韻譜』を見てみると、建安の時代には之韻と脂韻との区別がまだよく残っており、曹操、曹丕、曹植



らに極く稀な例外はあるものの、少くとも王粲の作にはこれ以外に之脂韻通押の例は一例も見られない。〈其三〉の詩に対する疑問はすでに提出されていることではあるが、やはり後世の擬作であるのかも知れない。

さて王粲の「七哀詩」〈其一〉は、『文選』五臣注の一、李周翰の注に「此の詩は漢の乱るるを哀しむなり」というように、漢末の戦乱の中での悲惨な民衆の姿を描き、社会の混乱を嘆くものである。「復た中国を棄てて去り、身を遠ざけて荆蛮に適く」というのは、作者の実体験をふまえている。荆蛮とは荆州の地であり、当時の戦乱に捲き込まれていなかったことから、中原の人士でこの地へ避難した人は少くなかった。王粲もまた祖父王暢の弟子に当り、当時この地の刺史を務めていた劉表を頼り、初平四年（一九三）、年十七歳の時に長安を脱出して荆州に赴いたのである。この詩の制作時期についてはこの長安脱出時の作とするのが一般的であり、またそう見るのが自然かも知れないが、回想の作と見ることも十分に可能であり、そのことについてはまた後に触れる。

詩は先に挙げた二句を含んだ前四句を導入部とし、中間の十二句で戦乱による困窮のために子供を棄てる婦人を中心とした難民の描写へと展開し、さらに結びの四句で治政を願う『詩経』曹風の「下泉」の詩の思うことを述べて全篇が締めくくられている。この詩の主題はいうまでもなく結びの四句に示されており、ここにはいくつか注意すべき点がある。一つには中間十二句での激越な調子を収斂して詩を終結へと導びく上で効果的な役割を果たしている。「南のかた霸陵の岸に登り」の句である。この句は後世、沈約の『宋書』謝靈運伝論に「仲宣（王粲の字）霸岸の篇」と呼ばれ、呉兢の『樂府古題要解』に「王粲南登霸陵岸」と記されるように王粲「七哀詩」〈其一〉の代名詞ともされるほど有名でかつ評価の高いものであるが、霸陵とは前漢の文帝の陵墓の地であり、文帝は漢代有数の平和な時代を築きあげた名君であった。ここでは当時の混乱した社会を目の当りにするにつけて墓下の文帝が追慕されるという気持ちが進められていると見るべきであろう。また今一つ注意すべきは「下泉の人」についてである。「下泉の人」とは『文選』の李善注に指摘されるように直接には平和を願う『詩経』「下泉」の詩の作者を指すのであるが、どうもそれだけではなさそうである。「下泉の人」とは文字通りには死者を意味し、たとえば『文選』の李周翰の注に「下泉の人とは戦死の人を謂ふ」とあるように戦乱のために命を落した人も含み

得るし、『魏晉南北朝文学史参考資料』が指摘するように霸陵の主である漢の文帝をも含み得るであろう。さらにはまた伊藤正文氏が「王粲伝論」でこの「下泉の人」を王粲の師、蔡邕と想定し、王粲が蔡邕を哀悼するためにこの作品を作ったように思われると述べられるも興味深い発言である。私はこの「下泉の人」にはそうした過去の人人が重層的に意識されていると思うし、要するここではこの詩に死者を悼む気持が込められていることを確認しておく必要があるだろう。

また王粲「七哀詩」〈其一〉は、前後を緊密に連関させつつ一篇をまとめあげる構成の巧みに王粲詩の持つ知性人格が十分に窺えるし、その写実的な表現の面では確かに漢代の古詩、古樂府の世界を脱化した点が認められるであろう。しかしながらこの作品にうたわれる内容や発想が王粲にだけ見られる特異な現象かといえは、それは決してそうではない。たとえばこのような漢末の混乱した社会を描写したものとしては、同じ「七哀詩」の作者である阮瑀に、継母が子供を虐待する内容をうたった「駕出北郭門行」があるし、さらに目を前の時代に転ずれば、漢代の樂府古辭「婦病行」「孤兒行」なども類似の発想を持つ作品である。やはりその内容、発想の面においては漢代の作品の影響を受け、その性格を強く残しているといえるだろう。

次に〈其二〉の詩は、旅愁をうたうものである。「荆蛮は我が郷に非ず、何為れぞ久しく滯淫するや」というのは、〈其一〉の詩を承けて作者が戦乱の長安を避け、荊州の地にあったことをいう。王粲は初平四年（一九三）に荊州に赴いてから建安十三年（二〇八）に曹操の幕下に召されるまで足掛け十六年をこの地で過すのであるが、頼りとした劉表は必ずしも彼に好意的でなかったらしく、王粲は憂鬱な日々を送っていたようである。そしてこの時期の彼の心境が有名な「登樓賦」に示されていることはよく知られているところであるが、この「七哀詩」〈其二〉もほぼそれと同じ内容をうたうものと見てよい。

詩の構成は〈其一〉と同じく三段から成っており、最初四句の導入部と中間八句の叙景部と結び六句の抒情部とに分けられるだろう。中国の詩の歴史の上から見ると、この詩の特色はやはり「山崗には余暎有り」以下の八句に見られる自然描写の部分にあり、その写実的な手法は〈其一〉の詩と同様に漢代の古詩、古樂府の中には見

出しにくいものであつて、後世の叙景句の先驅をなすものである。また〈其一〉の詩と比較すると、この詩には〈其二〉の詩に見られた叙事的で激越な調子がほとんどなく、かえつてより抒情的で感傷的な気分が強くなつてゐることに気が付く。そしてその抒情的で感傷的な性格は、次代の西晋期の「七哀詩」に最もよく継承されてゐるようである。

ところで「独夜 寝ぬる能はず」の句以下の結びの六句についていえば、やはり漢代の古詩の影響を強く受けてゐることに注意しなければならない。「独夜 寝ぬる能はず、衣を撰へて起ちて琴を撫す」の二句は、『文選』古詩十九首〈其十九〉に見える「憂愁 寝ぬる能はず、衣を攬りて起ちて徘徊す」の二句を意識したものである。また樂府古辭「傷歌行」には「憂人寝ぬる能はず、耿耿として夜何ぞ長き、……衣を攬りて長帯を曳き、屣履して高堂より下る」の句も見えてゐる。「絲桐 人情に感じ、我が為に悲音を發す」の二句についても、発想自体には「古詩十九首〈其五〉の「上に絃歌の声有り、音響一に何ぞ悲しき」などの句と通い合うものがある。また客愁をうたう詩が漢代の古詩にしばしば見られることは改めていうまでもないことであり、やはりこの作品も漢代の詩の影響下にあることは否定できないだろう。

## 三の2

次に曹植の「七哀詩」には、『文選』所収の一首と他に逸句二例とがある。

明月照高樓 流光正徘徊

明月 高樓を照らし、流光 正に徘徊す。

上有愁思婦 悲歎有餘哀

上に愁思の婦有り、悲歎して余哀有り。

借問歎者誰 言是客子妻

借問す歎する者は誰ぞと、言ふ是れ客子の妻と。

君行踰十年 孤妾常獨棲

君 行きて十年を踰え、孤妾 常に独り棲む。

君若清路塵 妾若濁水泥

君は清路の塵の若く、妾は濁水の泥の若し。

浮沈各異勢 會合何時諧

浮沈 各々勢を異にす、會合 何れの時か諧はん。

願爲西南風 長逝入君懷

願はくは西南の風と爲り、長く逝きて君が懷に入らん。

君懷良不開 賤妾當何依

君が懷 良に開かずんば、賤妾 当に何にか依るべき。

〔『文選』卷二三〕

南方有鄴氣 晨鳥不能飛

南方に鄴氣有り、晨鳥飛ぶを得ず。

〔『文選』卷二八・鮑照「苦熱行」李善注引〕

膏沐誰爲容 明鏡闇不治

膏沐 誰が爲にか容つくらん、明鏡 闇くして治めず。

〔『文選』卷三一・劉鑠「擬行行重行行」李善注引〕

「明月照高楼」の一首は、長い間旅に出たまま帰らぬ夫を一人わびしく待ち続ける妻の哀しみをうたったいわゆる閨怨詩である。もつともこの詩に寓意を見ようとする説もあり、兄の曹丕に対する曹植の思慕の情をうたと見るところから、雍丘時代の作、あるいは兄曹丕が即位して文帝となってからの作とその制作時期を推定するものもあるが、いずれも臆測の域を出ない。

この作は『文選』が「七哀詩」の題で収める以外に、『玉台新詠』（卷二）では「雜詩」五首の一として収めるし、『芸文類聚』（卷三三）は人部閨情の項に特に題を示さず「曹植詩曰」としてこの詩を引いている。また前に述べたように『宋書』（卷二二）樂志三・楚調・怨詩の項には「明月、東阿王詞、七解」として、七解、解四句、計二十八句の形に敷衍された作が見えている。そして宋の郭茂倩の『樂府詩集』（卷四二）の相和歌辭・楚調曲の項には「怨詩行」と題して『宋書』に見える二十八句の作が収載され、さらにはその本辭としてこの十六句の作が収載されている。このように「明月照高楼」の一首は極めて複雑な伝わり方をしてるのであるが、それはこの作品が他の「七哀詩」とやや趣きを異にした閨怨詩の形を採っていることと、晋代に樂曲用の歌詞に組み入れられたことによるものと思われる。

唐の呉兢の『樂府古題要解』が「七哀」を樂府題として採り挙げていることも既に述べたが、例に挙げられて

いるのは王粲の「西京乱無象」の篇と曹植のこの作である。確かにこの二首の作には樂府的な趣向が感じられるし、一体に漢魏の古詩と樂府の間にはさして明確な区別があるわけではなく、たとえば『文選』所収の「古詩十九首」の一部が『宋書』樂志に採られたりもしている。しかし少くとも『文選』がこの「七哀詩」をいわゆる樂府と區別していたことは、別に樂府の項目が設けられていることからして明瞭であり、「七哀」を単に樂府題とくい切るにはやはり疑問が残るであろう。

ただ『樂府詩集』が曹植の作の前に「怨詩行」の古辞として収載している作品は他の「七哀詩」との関りで見ると、興味深い内容を持っている。その詩は次の通りである。

天德悠且長、人命一何促、百年未幾時、奄若風吹燭、嘉賓難再遇、人命不可續、齊度遊四方、各繫太山錄、人間樂未央、忽然歸東嶽、當須盪中情、遊心恣所欲、

この作は「古詩十九首」にしばしばうたわれる主題、つまり人生の短促さを嘆き、行樂すべきことをうたうものである。「太山錄」とは鬼録をいい、「太山」「東嶽」は死後、人の靈魂が集まる所と考えられていた。しかしこの作と曹植の作との関係は残念ながら明らかではない。そして明の梅鼎祖の『古樂苑』(卷二二)によれば、この「怨詩行」古辞の詩意と合致するのは阮瑀の「怨詩」と題する作品であり、曹植の作はむしろ漢の班婕妤の作と伝えられる「怨歌行」の詩意を祖とするとしている。

確かに棄婦の情をうたう点では、曹植の作と「怨歌行」古辞とは共通するであろうが、曹植の作の源流はその表現の面において「古詩十九首」により多く見出せる。次にその類似した表現を例示してみよう。

明月照高樓	西北有高樓	(「古詩十九首」(其五))
流光正徘徊	中曲正徘徊	"
上有愁思婦	上有絃歌聲	"
悲歎有餘哀	慷慨有餘哀	"

借問歎者誰	誰能爲此曲	
言是客子妻	無乃杞梁妻	"
願爲西南風	願爲雙鳴鶴	"
長逝入君懷	從風入君懷	〔玉台新詠〕所取「古詩」〔其六〕
君懷良不開	君亮執高節	〔古詩十九首〕〔其八〕
賤妾當何依	賤妾亦何爲	"

特に前半の部分などは「古詩十九首」〔其五〕の句と極めてよく類似している。要するに曹植の作もまた漢代の古詩の影響を強く受けているのである。もっとも曹植の作はただ漢代の作をそのまま踏襲したわけではなく、その構成には王粲の場合と同様に計算された知的な搜作が加えられている。しかしそのことは小論のテーマとされる問題であるから、ここでは省略する。

次に曹植の逸句二例について見れば、「南方有郢氣」の二句は南方遠征に従う兵士の歌のようであり、「膏沐誰爲容」の二句はやはり閨怨の作かと思われる。もっともこの逸句二例の韻字を見ると、「飛」字が微韻であり、「治」字が之韻であるが、当時この二韻は通用したはずであり、于安瀾の『漢魏六朝韻府』にも微之韻通押の例としてこれが採られている。そうするとこの逸句二例は同一の作であったのかも知れない。いずれにせよ曹植の「七哀詩」には複数の作品が存在していた。

### 三の三

次に阮瑀の「七哀詩」を見てみよう。

丁年難再遇	富貴不重來	丁年は再びは遇ひ難く、富貴は重ねては来らず。
良時忽一過	身體爲土灰	良時 忽ち一たび過ぎなば、身体 土灰と爲る。

冥冥九泉室 漫漫長夜臺 冥冥たる九泉の室、漫漫たる長夜の台。  
 身盡氣力索 精魂靡所能 身尽きて氣力索き、精魂 能くする所靡し。  
 嘉肴設不御 旨酒盈觴杯 嘉肴は設くれども御さず、旨酒は觴杯に盈つ。  
 出擴望故郷 但見蒿與萊 擴を出でて故郷を望めば、但だ蒿と菜とを見るのみ。

〔芸文類聚〕卷三四、〔初学記〕卷一四

阮瑀の「七哀詩」で現存するものは、王粲、曹植の場合と異なり、この一首のみである。ただ『芸文類聚』(卷三四)・人部・哀傷の項には「魏阮瑀七哀詩曰」として「丁年難再遇」の一首が引かれるのに続き、「又詩曰」として次の一首が引かれている。

臨川多悲風、秋日苦清涼、客子易爲戚、感此用哀傷、攬衣久躊躇、上觀心與房、三星守故次、明月未收光、鷄鳴當何時、朝晨尚未央、還坐長歎息、憂憂難可忘、

『芸文類聚』は以上の二首の阮瑀の作に続いて王粲の「七哀詩」二首を収載しているのであるが、王粲の場合も第一首目には「魏王粲七哀詩曰」とし、第二首目には単に「又詩曰」とのみ記している。そうするとこの「臨川多悲風」の一首は秋の景物に触発されて起る旅愁をうたう点で王粲「七哀詩」(其二)と似ているし、これもまた「七哀詩」の一つかとも思われるが断定はできない。なおこの一首は『芸文類聚』(卷二七)人部・行旅の項にも「魏阮瑀詩曰」として採られている。また『芸文類聚』に引かれる作品は刪節を加えられていることが多いから「丁年難再遇」の作にしてもあるいは完篇ではないのかも知れない。

さて阮瑀の「七哀詩」は死者の悲哀をうたうものである。この作品はいわゆる挽歌的性格を持つものであり、その特色は死者の悲哀が第三者的にはなく、死者自身の立場に立ち、死者自身の眼を通した形においてうたわれていることであろう。このように死者の立場に立ってうたうという形はやがて魏の繆襲の「挽歌」に受け継がれ、また晋の陸機や陶淵明の「挽歌」においても同様の形がとられるという具合に、後世の挽歌において一般化して行く。<sup>(16)</sup>

ところで死者自身の立場に立つという点はしばらく措くとして、死者の身に思を寄せてうたう詩となると、やはり漢代の古詩の中にすでにいくつか見えている。たとえば『文選』「古詩十九首」の〈其十三〉と〈其十四〉とがそれである。

驅車上東門、遙望郭北墓、白楊何蕭蕭、松柏夾廣路、下有陳死人、杳杳即長暮、潛寐黃泉下、千載永不寤、……

〔文選〕「古詩十九首」〈其十三〉

去者日以疎、生者日以親、出郭門直視、但見丘與墳、古墓犁爲田、松柏摧爲薪、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人、思還故里閭、欲歸道無因、

〔文選〕「古詩十九首」〈其十四〉

阮瑀の「七哀詩」は前に述べたようにより死者に密着しており、挽歌的性格が強くなっているとはいうものの、やはりこれらの作品の延長線上にあるものといえるであろう。そういえば明の梅鼎祚が樂府「怨詩行」古辭の詩意に合致するという阮瑀の「怨詩」は、

民生受天命、漂若河中塵、雖稱百齡壽、孰能應此身、猶獲嬰凶禍、流落恒苦辛、

の如くであり、ここでも人間の生死がうたわれている。阮瑀の「七哀詩」は、その感傷性において王粲、曹植の作に一步譲るようであるが、その内容においては「七哀詩」の一つの典型を示すもののように私には思われる。

ここで建安期の「七哀詩」に一通りの整理を加えてみよう。まず作者の王粲、曹植、阮瑀の三人の関係についてである。建安文学はよく知られるように曹氏父子を中心に形成された文学者集団の中から生れたものであった。そうした作詩の場の状況を反映するかのようには、この時期には複数の詩人が詩題やテーマを同じくする作品を少なからず残している。そのことは鈴木修次氏の『漢魏詩の研究』に詳細に論述されている通りである。

そして王粲、曹植、阮瑀の三人は、単に「七哀詩」を共通の作として残すばかりでなく、「公讌」詩、「雜詩」や三良の故事をうたういわゆる詠史詩をも共通の作として残している。三良の故事をうたう詠史詩とは『詩経』



秦風「黃鳥」の詩に見える秦の穆公に殉じて死んだ三良のことを題材としたものであり、これもまた現存するものの限りでは王粲、曹植、阮瑀の三人にだけ見られるものである。三良の故事をうたう三人の作は、その内容からして、輿膳宏氏も指摘されるように、同一の場での作の可能性が多分にあるだろう。「七哀詩」の場合は、三良の故事をうたう詩のように明確に共通した内容を持つものではないし、現存する作品だけから性急な結論を導くことは危険なことかも知れないが、これもまた共通の場での作とは考えられないであろうか。たとえ共通の場での作ではないとしても、彼ら三人が共通の精神的基盤に立っていたことは確かである。曹植が王粲と親交を結んだことは、曹植の「王仲宣誄」によって十分窺えるし、王粲と阮瑀は魏の文壇に参加する以前から共に蔡邕を師とする同門の間柄であった。<sup>18)</sup> 彼ら三人の「七哀詩」の中で、王粲の作が実体験をふまえてうたわれていたところから、その制作時期をそのそれぞれの時とするのが一般的ではあるが、回想の作とすることも十分に考えられることと思う。

また建安期の「七哀詩」でうたわれる悲哀の対象になるものは確かに一様ではない。戦乱の悲哀、行旅望郷の悲哀、棄婦の悲哀、死者の悲哀と人生のさまざまな状況における悲哀がうたわれている。しかし大雑把にいえばそれらの悲哀は人生別離、人生無常の悲哀をうたうものと集約できなくもないだろう。しかしここでより注意すべきことは、いずれも共通して「古詩十九首」を中心とした漢代の古詩の影響を極めて濃厚に受けているという点である。もっとも漢代の古詩の影響を受けているのは建安詩一般がそうなのであるが、同じ時期の贈答詩や公讌詩などと比べてみても、「七哀詩」の場合はむしろ擬古的ともいえるほど漢代の古詩の影響を強く受けており、「古詩十九首」の直系の子孫ともいえそうである。

要するに建安期の「七哀詩」は、一種の題詠的な作品のようにも思われ、またそれは人間の死の問題を背後に含んだ人生の悲哀をテーマとし、かつ擬古風にうたうものではなかったろうか。そして次代の西晋期においては詩のテーマが人間の死の問題へと集中してくるのである。

## 四の1

西晉時代の「七哀詩」の作者としては、傅玄(二一七～二七八)、張載(三世紀後半)、潘岳(二四七～三〇〇)、荀組(二五八～三二二)の四人が挙げられる。ここではまず『文選』に二首の作品が採られている張載から見てみよう。張載には『文選』所収の二首と別に逸句がある。

## 其一

北芒何壘壘	高陵有四五	北芒 何ぞ壘壘たる、高陵 四五有り。
借問誰家墳	皆云漢世主	借問す 誰が家の墳ぞと、皆云ふ 漢の世主と。
恭文遙相望	原陵鬱膺膺	恭文は遙かに相望み、原陵は鬱として膺膺たり。
季世喪亂起	賊盜如豺虎	季世に喪亂起り、賊盜は豺虎の如し。
毀壞過一杯	便房啓幽戶	壤を毀つこと一杯に過ぎ、便房は幽戸を啓く。
珠柙離玉體	珍寶見剝膚	珠柙は玉体を離れ、珍寶は剝膚せらる。
園寢化爲墟	周墉無遺堵	園寢は化して墟と為り、周墉に遺堵無し。
蒙籠荆棘生	蹊逕登童豎	蒙籠として荆棘生じ、蹊逕には童豎登る。
狐兔窟其中	蕪穢不復掃	狐兔は其の中に窟し、蕪穢 復た掃はず。
頽隴並墜發	萌棘營農圃	頽隴は並びに墜発せられ、萌棘は農圃を営む。
昔爲萬乘君	今爲丘山土	昔は萬乗の君為りしも、今は丘山の土と爲る。
感彼雍門言	悽愴哀往古	彼の雍門の言に感じ、悽愴として往古を哀しむ。

## 其二

秋風吐商氣 蕭瑟掃前林

秋風は商氣を吐き、蕭瑟として前林を掃ふ。

陽鳥取和響 寒蟬無餘音

白露結中夜 木落柯條森

朱光馳北陸 浮景忽西沈

願望無所見 惟覩松栢陰

蕭蕭高桐枝 翩翩栢孤禽

仰聽離鴻鳴 俯聞蜻蛚吟

哀人易感傷 觸物增悲心

丘隴日已遠 纏綿彌思深

憂來令髮白 誰云愁可任

徘徊向長風 淚下霑衣衿

漢祖想粉榆 光武思白水

陽鳥は和響を収め、寒蟬は余音無し。

白露は中夜に結び、木落ちて柯条は森たり。

朱光は北陸に馳せ、浮景は忽ち西に沈む。

願望するも見るところ無く、惟だ松栢の陰を觀るのみ。

蕭蕭たる高桐の枝、翩翩として孤禽栖む。

仰いでは離鴻の鳴くを聴き、俯しては蜻蛚の吟ずるを聞く。

哀人は感傷し易く、物に触れて悲心を増す。

丘隴は日々に已に遠く、纏綿として弥<sup>よ</sup>思は深し。

憂來りて髮をして白からしむ、誰か云ふ 愁は任ふ可しと。

徘徊して長風に向へば、涙下りて衣衿を霑す。

漢祖は粉榆を思ひ、光武は白水を思ふ。

〔文心雕龍〕卷七・麗辭

〈其一〉の詩は洛陽北郊の北芒山にある漢の皇帝の陸墓が荒れ果てているのを見て人生の無常を嘆くものである。出だしの六句に導人部があり、「季世喪乱起」以下の十四句に陵墓の描写があり、結びの四句に詩の主題が提示されるといふ三段の構成は、王粲「七哀詩」のパターンをそのまま襲っている。「季世喪乱起」の二句は、王粲「七哀詩」〈其一〉の冒頭の二句をふまえたものであろうし、結びの部分で「雍門周」の故事を用いているのも、王粲「七哀詩」〈其一〉が結びの部分に「詩経」「下泉」の典故を用いているのと類似している。張載「七哀詩」〈其一〉は恐らく王粲「七哀詩」〈其一〉を意識したものであつたらう。ただ張載の作は、王粲の作に見られたような激越な調子が影をひそめ、より抒情的、感傷的な気分が強くなっているが、それは西晋期の作品一般についてもいえることなのである。

さて「雍門周」の故事とは『桓子新論』の琴道に見える次のような話である。雍門周が琴を手にして斉の孟嘗君にまみえていった。「臣竊に悲しむ、千秋万歳の後、墳墓に荆棘生じ、狐兔は其の中に穴ほり、樵兒牧豎は躑躅

して其の上に歌ひ、行人は之を見て悽愴たらん。孟嘗君の尊貴なるも如何にして此を成さんや」と。この言を聞いた孟嘗君は嘆息して涙を流したという。この雍門周の言の中に見る語、たとえば荆棘、狐兔、樵兒牧豎、さらには悽愴などがほとんどそのままの形で詩の中に取り入れられていることから、この故事が張載「七哀詩」〈其一〉において重要な役割を果しているが分るだろう。また『淮南子』の覽冥訓には「雍門子は哭を以て孟嘗君に見ゆ」ともある。「哭」とは人の死を悼んで声をあげて泣く礼である。このように雍門周は哭礼をよくすることでも知られる人であった。それはともかくも〈其一〉の詩が、人の死の問題をテーマとするものであることはいうまでもないであろう。

次に〈其二〉の詩は秋のもの寂しい風物に触発されて起る人生無常の悲哀をうたうものである。詩の構成は〈其一〉の詩の場合とやや異なり、前半の十四句に叙景があり、「哀人易感傷」以下の後半の八句に抒情がある。またその感傷的な気分は〈其一〉の詩よりもさらに強いものがあり、その意味では王粲の「七哀詩」〈其二〉を意識しているかも知れない。

叙景の部分について見れば、ここでもやはり墓地が描かれている。「惟觀松柏陰」の「松柏」が墓地に植えられる木であることはよく知られているが、後漢の仲長統の『昌言』によれば「古は葬るに松柏梧桐を植えて以て墳を識す」とあるから、「肅肅高桐枝」も墓地を象徴する景物としてうたわれているのであろう。

「哀人易感傷」以下の抒情部では先人の詩句をふまえた表現が多く見られる。まず「哀人易感傷」の句は『文選』李善注によれば漢の秦嘉の「答婦詩」にある句をそのまま用いたものであるし、「丘隴日已遠」の句については李善は「古詩十九首」〈其一〉の「相去ること日に已に遠し」の句を引いているが、古詩十九首〈其十四〉の「去る者は日に以に疎し」の句も考慮すべきであろう。「憂來合髮白」の句もやはり李善によれば、「古詩」の「誰か憂を懷かざる、我をして白頭なら令む」をふまえているし、「誰云愁可任」の句は、王粲「登樓賦」の「誰か憂思に任ふ可き」によっている。さらに「徘徊向長風」の句は『楚辭』「遠遊」の「高風を溯へて以て徘徊す」に、「淚下霜衣矜」の句は『楚辭』「自悲」の「泣きて歎歎して襟を沾す」にそれぞれ基づいている。また「淚下

「霑衣矜」の句は、「古詩十九首」へ其十九に「淚下りて裳衣を沾す」とあるのにもよるのだろう。このように張載「七哀詩」へ其二の後半の抒情の部分は前代の感傷文学を網羅したかの感がある。先人の詩句をほとんどそのままの形で自己の作品の中に取り入れるということは、必ずしも張載にのみ特有の現象でなく、西晋期の詩人にはよく見られる手法である。

この作品もまた人の死の問題をテーマとするものであるが、『文選』五臣注の一つである張銓は「丘隴日已遠」の句に注して「丘隴は其の先人を謂ふなり」と述べている。そうすると張銓は「丘隴」を一般的な死者と見ずに作者張載の先祖と見ているようであり、この詩は作者自らの先祖を哀悼した作ということになる。恐らくはそれも一つの可能な解釈であろう。

次に逸句一例は丁福保の『全漢三国晋南北朝詩』に未収のものであり、『文心雕竜』の対句の論の中に引かれているものである。しかしその全体の内容はこの二句からだけでは窺うことができない。

## 四の2

西晋期で注目すべきことは、潘岳に「七哀詩」の名で伝えられる作品が見られることである。潘岳はいうまでもなく陸機と並ぶ西晋太康期最大の詩人であり、人の死を悼む哀悼の作に数多くの名作を残した人として知られる。彼の作は次の通りである。

淮如葉落樹 逸若雨絶天 淮たること葉の樹より落つるが如く、逸たること雨の天に絶ゆるが若し。

〔雨絶有歸雲 葉落何連山 雨絶えて帰雲有るも、葉落つれば何か山に連らん。〕

時氣冒崗嶺 長風鼓松柏 時氣は崗嶺を冒ひ、長風は松柏を鼓す。

堂虚聞鳥聲 室暗如日夕 堂は虚にして鳥声を聞き、室は暗くして日夕の如し。

晝愁奄逮昏 夜思忽終昔 晝愁 奄ちに昏に逮び、夜思 忽として終昔なり。

展轉獨悲窮 泣下筥枕席 展転として独り悲窮し、泣下りて枕席を霑す。

人居天地間 飄若遠行客 人 天地の間に居ること、飄として遠行の客の若し。

先後詎能幾 誰能鑿金石 先後するも詎ぞ能く幾いくばくぞ、誰か能く金石を鑿たぎらん。

（『藝文類聚』卷三四）

実はこの作品は『藝文類聚』に七を除いた「哀詩」の題で引かれており、以後、明の張溥の『漢魏六朝百三名家集』や民国の丁福保の『全漢三国晋南北朝詩』など六朝詩の総集はすべて「哀詩」の題で伝えているところから、従来この詩は「七哀詩」の一つとしては取り挙げられなかった。ところがこの詩の冒頭の二句が『文選』巻四〇、謝朓「拜中軍記室辭隨王牋」の李善注に引かれて、それには「潘岳、楊氏七哀詩曰」とされているのである。このように「七哀詩」の上に「楊氏」といった固有名詞が付されているのはこれ一例だけであり、それ自体注目すべきことであるが、潘岳で楊氏といえはまず思い浮ぶのは彼の妻である。潘岳の妻は彼の同郷の名家、楊肇の長女であり、潘岳五十二歳の時に死亡したと推定される。潘岳がその死を悼んで作ったのが有名な「悼亡詩」三首であり、『文選』巻二三・哀傷の部は「七哀詩」に続いてこの「悼亡詩」三首を収録している。そうすると「楊氏七哀詩」といえば「悼亡詩」と同様のことがらをうたったものということになるのであるが、事実そうした目で見ればこの作品は「悼亡詩」三首を一首に凝縮したかの感が強い。また「哀詩」として伝えられたこの作品に「悼亡詩」との類似性に気付いていた人もいた。それは清の陳沆であるが、彼の『詩比興箋』はこの詩を取り挙げて「此も亦 安仁（潘岳の字）の悼亡詩なり」と述べている。

ただ「悼亡詩」三首と比較すると、やはり『詩比興箋』が「十九首の風有り」と指摘するように擬古的な傾向が強いようである。たとえば「泣下筥枕席」の句は張載の作に類似の表現があったから省略するとして、特に「人居天地間」以下の四句について見れば、この部分は正しく「古詩十九首」の世界である。古詩十九首（其三）の「人居天地間に生れ、忽として遠行の客の如し」、（其十一）の「人生は金石に非ず、豈に能く、長く寿考ならんや」、（其十三）の「人生は忽として寄するが如し、寿に金石の固無し」などの表現を挙げればそのことは了解されるであろう。前に述べたようにこのような擬古的な趣向もまた「七哀詩」の一つの性格と思われる。

『文選』の李善注に「楊氏七哀詩」とするからには、当時この作品をこの題に作るテキストがあったはずであり、「楊氏」はともかくとしても『芸文類聚』が「哀詩」に作るのは「七」を脱落させたものではなかったらうか。

四の三

傅玄、荀組の「七哀詩」はいずれも逸句のみである。

傅玄

杳杳三泉室 冥冥玄夜堂 杳杳たる三泉の室、冥冥たる玄夜の堂。

〔北堂書鈔〕卷九二・礼儀部・挽歌

荀組

轍兮轍兮 何其寂寞茂一 轍よ轍よ、何ぞ其れ寂寞たる。〔『文選』卷二〇・謝靈運「鄰里相送方山詩」李善注引〕

この逸句二例はいずれも丁福保『全漢三国晋南北朝詩』に未収のものである。まず傅玄の例についていえば、「三泉室」といい、「玄夜堂」といい、ともに墓室をいうものであるから、前に述べた阮瑀の「七哀詩」と類似の内容を持つ作品であったのかも知れない。阮瑀の作には「冥々たる九泉の室、漫々たる長夜の台」の句があったし、さらには「古詩十九首」〔其十三〕にも「杳々として長暮に即く」の句が見えていた。そして傅玄にはこの「七哀詩」とは別に「挽歌辞」三首があり、それは同じ『北堂書鈔』礼儀部・挽歌の項に見えている。一海知義氏の「文選挽歌詩考」によれば、傅玄の「挽歌辞」は六朝期の他の三首編成の挽歌と同じく、納棺から祖載、葬送、埋葬と三つの場面をうたい分けているものである。『北堂書鈔』がこれらの挽歌と同じく傅玄の「七哀詩」を挽歌の項に引いているところを見ると、やはり傅玄の「七哀詩」は挽歌的趣向を持つものであったのだろう。

次に荀組の「七哀詩」についていえば、この逸句は『文選』卷二六・陸厥「奉答内兄希叔」にも「荀組、七哀

詩曰」として「何其寂蕩」（「蕩」をここでは「蕩」に作る）の一句のみが見えている。

荀組は潁川の荀氏の称で知られる魏晉時代の名家の出であり、兄の荀藩とともに西晋末の混乱の時代から東晋初期にかけて政界の中樞にあつて活躍し、太尉の位にまで就いた人である。『隋書』経籍志に引かれる梁の阮孝緒の『七録』によれば、彼に三巻の文集があつたとされるが、彼の作品はほとんど今日に伝わらず、丁福保『全漢三国晋南北朝詩』には一首の作も見えないし、戴可均の『全上古三代秦漢三国六朝文』に逸文三例が見えるだけであつて、文学者としては全く知られない人である。ただ『全晋文』の逸文三例の中、「議定父子生離哀表」と「請議定改葬服制表」とが喪服の儀礼に関する発言であることには注目される。喪服の儀礼に詳しい人であつたのかも知れない。

さて荀組の「七哀詩」はただの二句であるから全体の内容を知ることが到底不可能である。しかしあえて想像をたくましくすれば、「轍」は、それが誰であるかは分らないが、人名のようであるし、また「寂蔑」の語は、李善が注した本文を見ると、謝靈運の詩句は「音塵もて寂蔑を慰めよ」と知人との別れに際して身の孤独を慰める便りを請うものであり、陸厥の詩句は「徂落 云に是にして、寂蔑 終に斯に始まる」という落魄した境遇を嘆くものであるから、荀組自らの孤独を嘆くものであろう。轍なる人物と離別したか、死別したことをうたつたものではなかつたらうか。

荀組の「七哀詩」が他の「七哀詩」と異つて四言であることは何か特別の場での作を思わせる。ただ西晋期には贈答詩を中心に好んで四言詩を作つた詩人のグループがあり、そのことについては後藤秋正氏の「（分）輿虞詩小論」に指摘があるが、荀組の作もあるいはそうした影響を受けたものであつたのだらうか。

## 五

以上、建安期から西晋期に至るまでの「七哀詩」について管見の及ぶ限りを搜集してきたのであるが、すでに



指摘したようにそれらは共通して擬古的な性格を持ち、また建安期から西晋期に至るとその悲哀の対象となるものが人間の生死の問題に集中してきている。たとえ直接に人間の死を悼むものでないとしても、人間の生死の問題が必ずその背後にあり、人間の生が永遠ではあり得ないということについての悲哀がうたわれているのである。

「七哀詩」に関する発言が唐の呂尚以前に見られないことは初めに述べた。しかしながら「七哀詩」についてその意味を直接に述べるものではないが、「七哀詩」を人の死を悼む詩として取り挙げているものが六朝末期に見られる。陳の江総の次の詩がそれである。

在陳且解醒共哭顧舍人

獨酌一樽酒、高詠七哀詩、何言蒿里別、非復竹林期、增荒鄭公草、戸闔董生帷、人隨暮槿落、客共晚鶯悲、年髮兩如此、

傷心詎幾時

〔全陳詩〕卷三

題の「顧舍人」とは、『藝文類聚』(卷三四)がこの詩を引いて、題を「傷顧野王」と作っていることから知られるように、『玉篇』の編者として知られる顧野王のことである。『陳書』(卷三〇)の本伝によれば、顧野王は陳の後主が皇太子であった時の東宮通事舎人をつとめており、江総とはその東宮での同僚であったらしい。そしてこの詩は彼が陳の宣帝の太建十三年(五八一)に六十三歳で没した時に江総がその死を悼んで作ったものと思われる。ここに見える「七哀詩」は彼の死を哀悼する歌として用いられていると見てよいであろう。

「七哀詩」を哀悼の詩とするのは、江総ばかりではない。杜甫に「八哀詩」があることもすでに述べたが、これは諸注の指摘を引くまでもなく魏晋の「七哀詩」を意識したものであろう。そして杜甫の「八哀詩」には杜甫自身の序があり、これに「時に盜賊未だ息まざるを傷み、王公李公より興起し、旧を嘆じ賢を懐ひ、張相国に終る。八公前後存没す。遂に銓次せず。」というように杜甫の作も王思礼、李公弼以下張九齡に至る八人の人物を哀悼して作ったものである。そういえば杜甫の夔州時代の詩に「垂白」と題する作があり、この詩の末尾に「甘ん

じて千日の酔に従ひ、未だ七哀詩を許さず」という句が見えている。ここでいう「七哀詩」もむろん魏晉期の「七哀詩」を意識したものに相違ないが、杜甫の理解した「七哀詩」は人生の悲哀の中でもやはり人の死の哀しみに傾斜したものでなかったらうか。このように江総、杜甫の二人の詩人が「七哀詩」を哀悼の詩ととらえていることは、「七哀詩」の性格を考える時に極めて示唆的といふべきである。

一体、『文選』の哀傷の部立は「七哀詩」が中心になったものであつたらうが、『文選』が「七哀詩」の子孫として取り挙げてゐるのは潘岳の「悼亡詩」、謝靈運の「廬陵王墓下作」、顔延之の「拝陵廟作」、謝朓の「同謝諮議銅雀台詩」、任昉の「出郡伝舎哭范僕射」の諸作である。それらは当然のことながら人の死を悼む詩がほとんどであり、「七哀詩」の場合に比べると、より個別的な状況をうたう詩になつてきている。しかしそれにしても東晉以後「七哀詩」の題の作品が見られなくなったのは何故なのだろうか。それはまた別の検討を要する問題である。

- (1) 小尾郊一氏『中国文学に現われた自然と自然観』(昭和三七年・岩波書店)第二節・叙景の詩、四・「招隱の詩、参照。  
 (2) 宋・葛立方『韻語陽秋』(卷四)「七哀詩起曹子建、其次則王仲宣、張孟陽也。釋詩者謂病而哀、義而哀、感而哀、悲而哀、耳目聞見而哀、口歎而哀、鼻酸而哀、謂一事而七者具也。子建之七哀、哀在於獨棲之思婦、仲宣之七哀、哀在於棄子之婦人、張孟陽之七哀、哀在於已毀之園寢、唐雍陶亦有七哀詩、所謂君若無定靈、妾作不動山、雲行出山易、山逐雲去難、是皆以一哀而七者具也。……」なおここでいう唐の雍陶の「七哀詩」は、曹植の作に擬したものである。

(3) 鈴木虎雄氏『玉台新詠』(上)(昭和二八年・岩波文庫)二〇二—二〇三頁。また鈴木虎雄氏『杜詩』(第六冊)(昭和四一年・岩波文庫)七四—七五頁。

(4) 鈴木修次氏『漢魏詩の研究』(昭和四二年・大修館書店)第三章・建安詩考、第二項・建安詩の題材と賦、五四—一頁。

(5) 余冠英氏『三曹詩選』(一九五六年・作家出版社)一〇一頁。

(6) 伊藤正文氏『王粲詩論考』(一九六五年・京都大学『中国文学報』第二〇冊)四五—四八頁

(7) 白川静氏『中国の古代文学』(二)(昭和五一年、中央公論社)二四二頁。

(8) アンリ・マスベロ氏著、川勝義雄氏訳『道教』(一九六六年・東海大学出版会)「中国六朝時代人の宗教信仰における道教」参照。

(9) 清・張翼「陰餘叢考」七七「楊升庵亦曰、人生四十九日、而七魄全、死四十九日、而七魄散。」

(10) 鈴木修次氏前掲書、六一四頁。伊藤正文氏前掲論文、四六頁。

(11) 北京大学中国文学史教研室選注『魏晉南北朝文学史參考資料』(上册)(一九六二年・中華書局)一三一頁。

(12) 伊藤正文氏「王粲伝論」(二)昭和三九年、大修館書店『漢文教室』第六七号、二二頁。

(13) 伊藤正文氏「王粲詩論考」参照。

(14) 黄節『曹子建詩註』参照。

(15) 明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀<sup>一</sup>、借問歎者誰、自云客子妻、夫行踰十載、孤妾常獨棲<sup>二</sup>、念君

過於渴、思君劇於飢、君爲高山相、妾爲濁水泥<sup>三</sup>、北風行蕭蕭、烈烈入吾耳、心中念故人、淚墮不能止<sup>四</sup>、浮沈各異路、

會合當何諧、願作東北風、吹我入君懷<sup>五</sup>、君懷常不開、賤妾當何依、恩情中道絕、流止任東西<sup>六</sup>、我歌竟比曲、此曲悲

且長、今日樂相樂、別後莫相忘<sup>七</sup>解

(16) 一海知義氏「文選挽歌詩考」(京都大学『中国文学報』第十二册)参照。

(17) 興膳宏氏「左思と詠史詩」(京都大学『中国文学報』第二二册)九一〇頁。

(18) 伊藤正文氏「王粲伝論」参照。

(19) 高橋和巳氏「潘岳論」(京都大学『中国文学報』第七册)参照。

(20) 一海氏前掲論文、二一一—二二頁。

(21) 後藤秋正氏「摯虞詩小論」(上)(昭和五一年・東京書籍『国語』一五六号)

(22) 『陳書』卷三〇「大建二年、遷國子博士、後主在東宮、野王兼東宮管記、本宮如故、六年除太子率更令、尋領大著作、掌國史、知梁史事、兼東宮通事舍人、時宮僚有清陽江總、……」